



—東地中海地域ニュース—

トルコ・スーダン：バシール・スーダン大統領のトルコ訪問中止

(11月7-9日付トルコ各紙)

1. 11月6日、スーダン政府はトルコ政府に対し、バシール・スーダン大統領が9日にイスタンブールで開催されるイスラム諸国会議(OIC)経済貿易常任委員会首脳会合に出席する旨を伝えた。
2. EU(議長国スウェーデン)はトルコに対し、ダルフル虐殺の責任を問われて国際刑事裁判所(ICC)から逮捕状が出ているバシール大統領がトルコを訪問することは認められず、EU加盟交渉国であるトルコはEU外交方針に従い、同大統領の訪問を拒否するべきであると伝えた。
3. トルコのギュル大統領はEUの反応に対し、「バシール大統領はOIC首脳会合に出席のためにトルコを訪問するのであり、トルコの招待により訪問するのではない。誰が何のためにこれに干渉出来るのか」と述べた。また、トルコ外務省は、バシール大統領はトルコ政府関係者との二国間会談を行わないことを発表した。
4. トルコでは、エルドアン首相がイスラエルのガザ攻撃に人道的理由で強く反発したにもかかわらず、ダルフル虐殺を指導したバシール大統領には何も反応を示さないのは矛盾であるとして、同大統領のトルコ訪問に否定的な論調が多い。米国では、在米トルコ大使館にバシール大統領のトルコ訪問に対する抗議行動が計画されている。
5. トルコ政府は、公式には本件は諸外国の干渉にはそぐわないとしながらも、EUをはじめ諸外国のトルコに対する圧力や内外世論の批判的論調を受け、スーダン政府にバシール大統領がトルコを訪問すべきではないと、非公式に伝えたとされる。
6. トルコがスーダン大統領の訪問を受け入れたい背景には、スーダンの豊富な石油資源の影響が大きいと見られる。また、ファイナンシャル・タイムズ紙は、今回の一件はトルコ的外交方針の転換(東へのシフト)により、トルコと欧米諸国の外交的立場に相違が深まりつつあることの証左であると報じている。
7. 11月8日、エルドアン・トルコ首相は次の通りTVで発言した。

(1) バシール大統領を招待したのは、トルコ政府ではなく OIC である。ガザとダルフールを同一視することは出来ない。イスラエルによるガザ攻撃とダルフールの状況は全く別物である。ガザ住民は未だ困難な状況にいるが、国際社会からの支援は十分になされていない。

(2) 自分自身、ダルフールに赴き現地を視察したが、虐殺があったとの事実を確認出来なかった。もしあったとしたら、バシール大統領にはっきりと進言する。私は(イスラエルの)ネタニヤフ首相とは気楽に話すことが出来ないが、バシール大統領とは腹を割って話すことができる。

8. 11月8日17時30分、スーダン政府はトルコ政府に対し、バシール大統領のトルコ訪問中止を公式に伝えた。バシール大統領は当初、18時半に到着予定であったため、ギュレル・イスタンブール知事が出迎えのためにイスタンブール空港で待機していた。